

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 2

號二二三三第・日二月八輯編局報情

大藏内閣圖書印



週報 眞寫

時の立札
國民大和一致
その全力を國家奉仕に發揮せん

小磯・米内協力内閣発足す



組閣までの経緯
東條内閣は、七月十八日つひに総辭職を執行した。その理由とするところは、二十日情報局發表によつて明らかになされた通りである。即ち

〇 初内閣を組んで (1) 米内海軍大臣、(2) 小磯内閣総理大臣、(3) 山田陸軍大臣、(4) 山田海軍大臣、(5) 高橋蔵相大臣、(6) 廣田農林大臣、(7) 尾崎通商大臣、(8) 榎方内務大臣兼情報局長、(9) 三宮文部大臣、(10) 廣瀬厚生大臣、(11) 林司法大臣、(12) 重光外務大臣兼大東亞大臣、(13) 前田逓送大臣、(14) 大津内務大臣、(15) 有澤大蔵大臣、(16) 三浦法務局長兼内閣書記官長

大東亞戦争以来、政府は大東亞と緊密一體の下、戦争遂行上あらゆる努力を重ね来りしが、現下非常の決戦期に際し、いよく人心を一新にし、強固に戦意を鼓舞するの要念なるを痛感し、廣く人材を求めて内閣を強化せんことを期し、百方手段を盡し、これが實現に努めたるも、遂にその目的を達成するに至らず、茲において政府は愈々人心を一心し、舉國戦争遂行に邁進するためには内閣の刷新を行ふを適當なりと認め、東條内閣総理大臣は、閣員の新表を取組め、十八日十二時四十分、拜辭を仰せつけられたる上これを閣下に揮退せり

決戦下、専断に与れるは、士氣を損じ奉り恐懼に堪へず。また前線後において必勝に邁進を続けつゝある一億國民諸君に對し、政府の微力を盡すと共に、戦争遂行のため奮を失

せず更に強力なる内閣の出現を期待してやまず、かくて二十日小磯陸軍大將、米内海軍大將はそれく宮中よりのお召しにより参内、兩者協力して内閣を組織すべしとの大命は降下した。よつて直ちに組閣に着手し、兩大將は二十二日午後一時半宮中に参内、天皇陛下に拜頭仰せつけられ、讀んで閣員名簿を捧呈し、引續き同日午後現任式を執り行はれ、こゝに新内閣は力強く誕生したのである

新内閣閣員

内閣総理大臣	小磯 國昭
外務大臣	重光 葵
大東亞大臣	重光 葵
内務大臣	大津 英
大蔵大臣	有澤 嘉
陸軍大臣	山田 元
海軍大臣	米内 光政
司法大臣	林 有造
文部大臣	三宮 治重
厚生大臣	廣瀬 久忠
農商大臣	島田 健雄
軍需大臣	藤原 銀次郎
逓信大臣	前田 米藏
國務大臣	町田 忠治
國務大臣	兒玉 秀雄
情報局長	榎方 竹虎

大命を拜して

内閣総理大臣 小磯 國昭

今回擧りしも盟友米内海軍大將と共に御召しに浴し、重大時局下、組閣の大命を拜しましたことは洵に恐懼感激に堪へませぬ

ひたすら、大御稜威に頼り、國民大和一致の協力を得て、一身を總局の突破に献け、あくまでも大東亞戦争完勝のため臣節の限りを盡し、以て微塵を安んじ奉らんことを期するのみであります

聖戦の進軍については既に大詔に昭かにせられ、朝野挙々皆かざるところであり、また國民努力の目標は開戦以来、しばしの機会に聲明せられたところでありまして、今更これに繰返す必要がありませぬ。たゞ不肖をしてこの際一言を費さしむるものありとすれば、それは現下の國難に臨む我々國民の信念と、これを行ふ實踐力の上に、今一段の徹底を必要とする點であります

即ち、大東亞戦争においては支那事變の後を受け、崇高なる國體の本義に基づく國民傳統の道義條條に顯著なる進境を示し、それが外、赫々たる戦果となり、内、幾多敵兵を戦力の増強となつて今日に及んだのでありますが、しかしながら心を凝らし、國內態勢の諸相を省みるとき、國民的固有道義の自覺と發揚とに於いて今一步の潛心工夫を要するものあるを看取いたすのであります。蓋しこれ一億同胞が遠く萬國の由來に鑑み、國體の本義に透徹し、我々各臣子として何をなすべきかの命題を個々の心境の上に開明し、しかして敢然各自の本分に挺身することによつて、豁然たる新境地を開闢し、直前奮進して一氣に勝を制すべき端緒を把握するに至るべきを確信いたすのであります

現下吾人の直面する戦局の起伏は、これ皇國の臣をして世界人類のために前途大いになすところあらしめんとしての神意に出づる試練のはかならずと解するのでありまして、一億のすべてが固有傳統の國民道義に徹し、必勝の信念を以て戦ひ抜くことのみが、この試練に打ち克つて國家の美譽を保全する唯一の道なのであります

不肖小磯菲薄を顧みず、この見地に立ち、國民諸君と共に内、大いに道義を昂揚して協力戦力の増強を策し、外、盟邦との連繫をますます緊密にして、戦争目的の達成に邁進せんことを期するものであります

國民諸君の現戦局に對する決然たる發憤が、必ずや鐵の脚絆となつて、政府の決戦方策に一層の協力を拂はるべきことを信じて疑ひませぬ

(昭和十九年七月二十三日發)

週間 點描

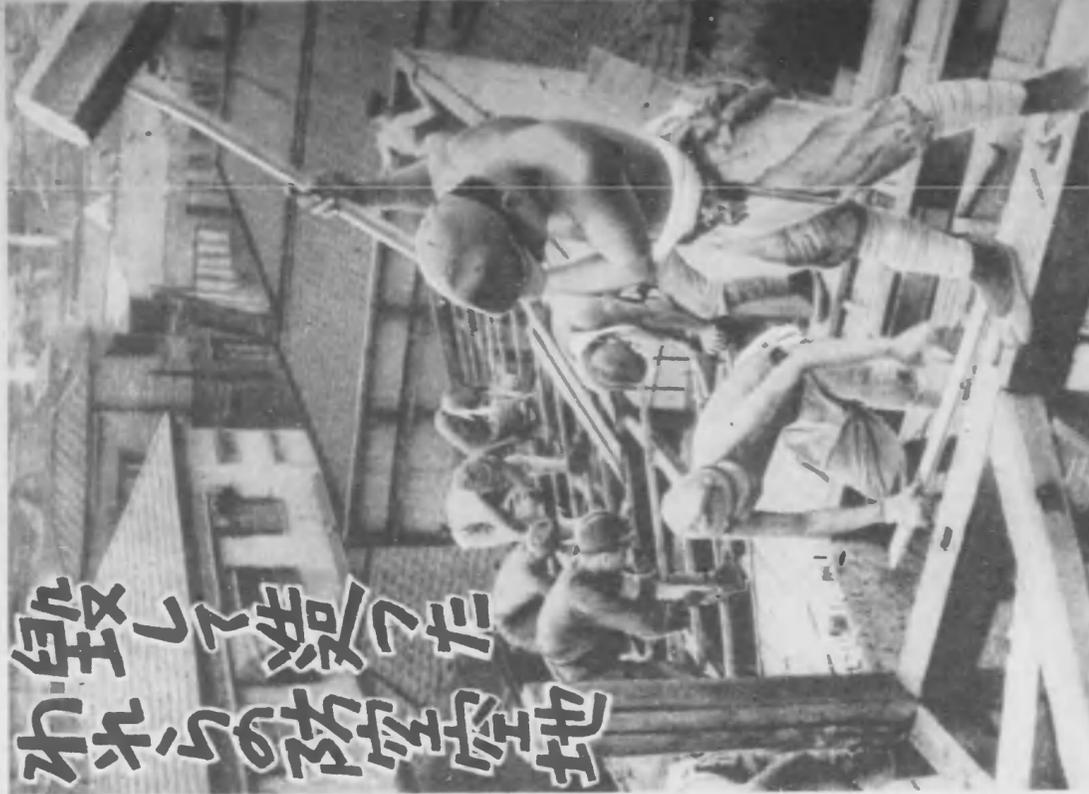


サイパン戦局の終結後、マリアナ諸島を中心とする敵の中部太平洋攻撃は當然豫想されるものであつたが、敵は七月二十一日大島に上陸を開始し、同方面の戦局は急遽に重大化した

大本營發表(昭和十九年七月二十三日) 七月二十一日朝二四時内外の敵は大島西岸南麓及び南麓の兩方面に上陸を開始せり、所在の我が部隊は之を奮勇阻中なり

かつてのグアム島である同島は、開戦前から太平洋戦路の要衝として知られ、敵は必死になつて同島の強化に狂奔してゐたが、開戦と同時にわが方に占領せられた。その後同島の奪回を夢見てきた敵は、今や有力艦隊の砲撃を頼みに同島に侵入して来たのである

同島はわが本土及び比島から二千三百キロ、パラオ東北方二千八百八十キロ、トラックの西北方四千四百キロの地帯にあり、こゝにさらに海空基地を獲得せんとする新作戰に敵は、物量傾けつゝしてゐる。戦局の重大なることは、斯くて言ふまでもない。將兵の武運を無難し、一億の犠牲で死力をつくして前線の勇戦に臨むのみである



不毀して造った これら防空空地

□ とりこはしな鳥の木材で、疎開して来るヨイコノ學校を建て、石鳥の名案が五反田町で実行された。二十日間に五種の機動約千石分の木材を疎開した地元沼津青年鳥の機動とそぞろの兄弟心

帝都の建物疎開完了

□ 警防員や防衛員が除却された空家の窓や扉などを運び、厚板、鋸屑、土などがまたくうちに公共待避所の構設としてゆく、微塵ましくも頼むしいお徳の協力あり



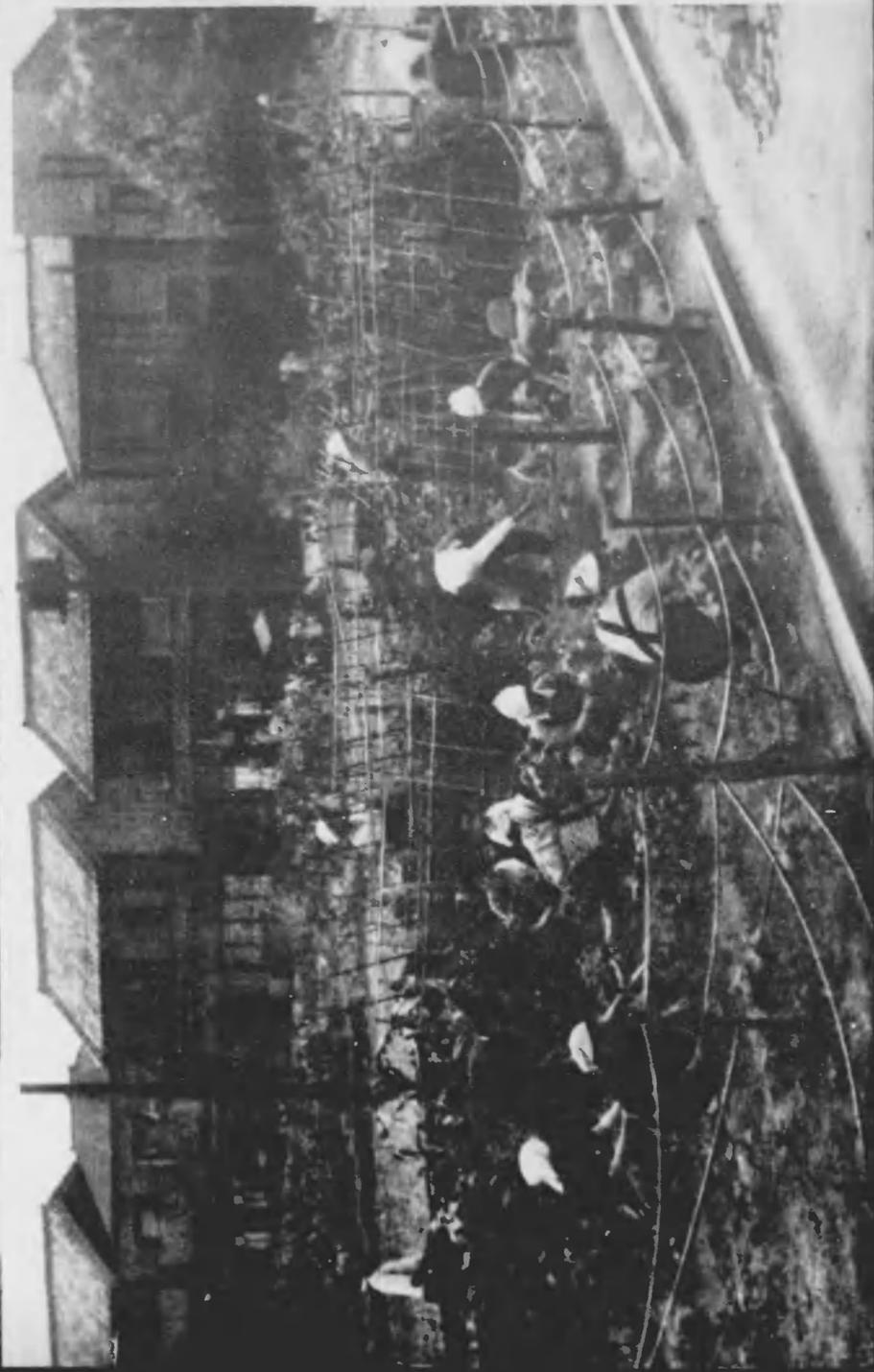
□ 空家がとりこわされたり、水きは木材の後始末だ。エフサ、エフサと、天下も物かは、木材を運んでゆくのは、上野区各町会の手廻り、からし汗の努力が疎開前に疎開を終へ、完全な防空壁を築き上げたのだ

□ 『受へはしつかり感はない』古材といつてもまだく、大木なもの。念いで逃つて敵機に焼くよう疎開が国民の戦國耐置なら、俺の防空壁とを国民の陣地だ——神田区にて



帝都の建物疎開は昨年十二月の第二次指定から始められた。當時敵アメリカは「あんなにたてこんだ東京がさう簡単にできるものか。でたらぬ目にかゝる」と冷笑したものであつた。敵前疎開のためわが家から名残りを惜しむつゝ、敢てといでたつ強制疎開者。その上による隣組、町会の人々の戦友愛があり、さらに建物の除却に當つては隣組はもちろんで、一日二万三千名による隊徒、或ひはまた軍隊も出動して協力するなど、正に「敵前疎開」の真意込みのものだ。十五ヶ所の建物疎開が全部指定の七月末日前には見事に終了した。しかも除却された古材はそれくお役に立てられてゐる。まづ、住宅に使えるものは産業戦士や強制疎開者が住む家を建てるのに廻はされるほか、建物に使へない古材は二重疎開者の荷造りにされたり、敵の空襲に備へて、数倍に増設された公共待避所の構設に活用された。これこそが敵の冷笑に叩きつけた八百万都民の戦果なのだ。

□ 写真は提供(五反田)朝日新聞社 毎日新聞社
目白をしの七十五世帯の家がたてこんだのは昔の姿。カマと日當りのよくなつた本所風車川橋五十一の疎開空地は、隣組機動と協力、トマト、かぼちがすくくと育ち、明るい戦果を誇る

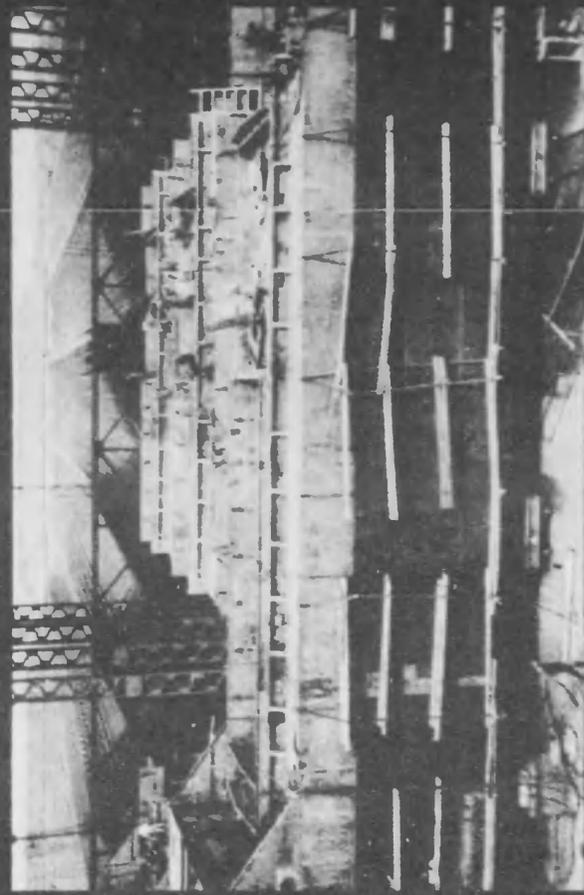


うら造を船

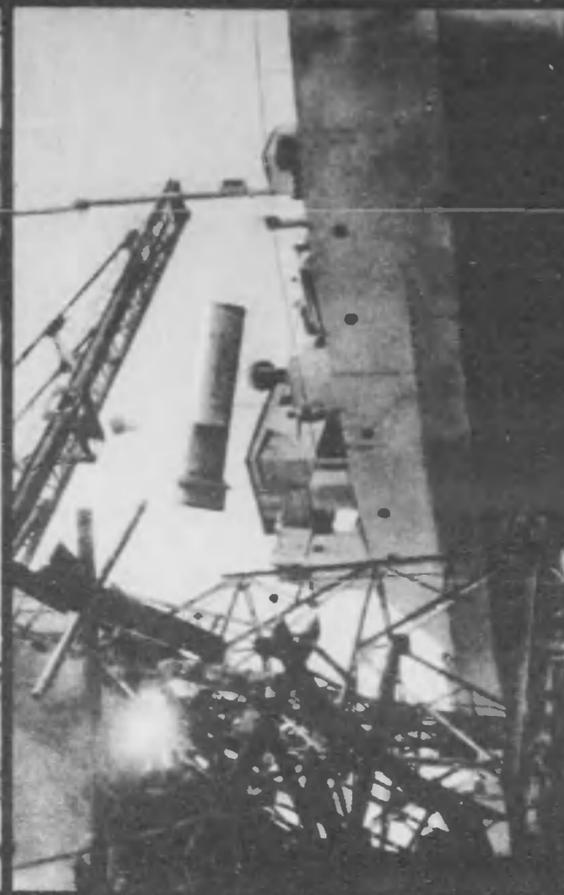
高橋 週報

書を見よ。この海の彼方に南の島々がある。忠忠の將兵と殉國の同胞の血潮に染めたサイパン島がある。その無数の島々を敵は尙も既々として狙ふ。米鬼來れと待ち構へる我が將兵へ盡し得る道はたゞ一つ。補給。飛行機、武器、彈藥の絶えなき補給である。これが無敵の卓攻を敢強たらしめる唯一の道である。また交際地帯より豊富な原料を選び、戦力を新へて敵を撃倒し得る最上の道である。船だ——船のほかはない。今や日本の運船界はサイパンの終りをそのまゝ夜を日に繼いで全能力をあげてゐる。見よ、進水塔上を滑り行くその雄姿を。聴け、騒鬧にも似た豪快な水音を。次ぎくに産み出される標準船の大群は、やがて南の海面を塞々と埋めて、勝利の補給を續けるであらう。

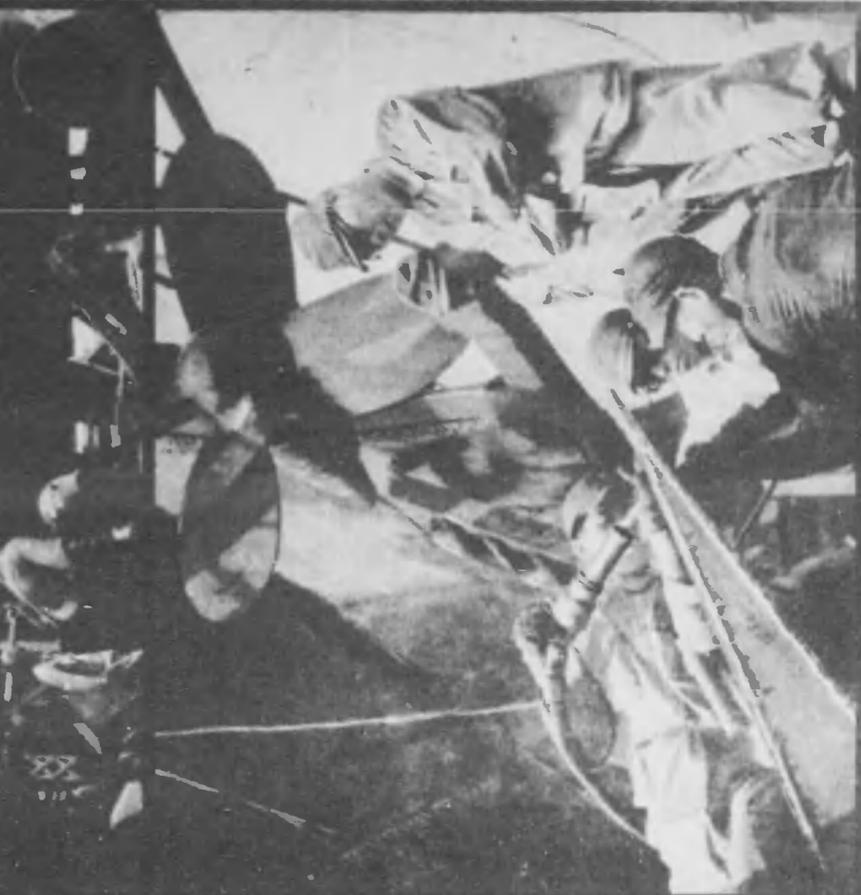
八分通り出来あがつた船體の一部



外部補給のつり上げ作業



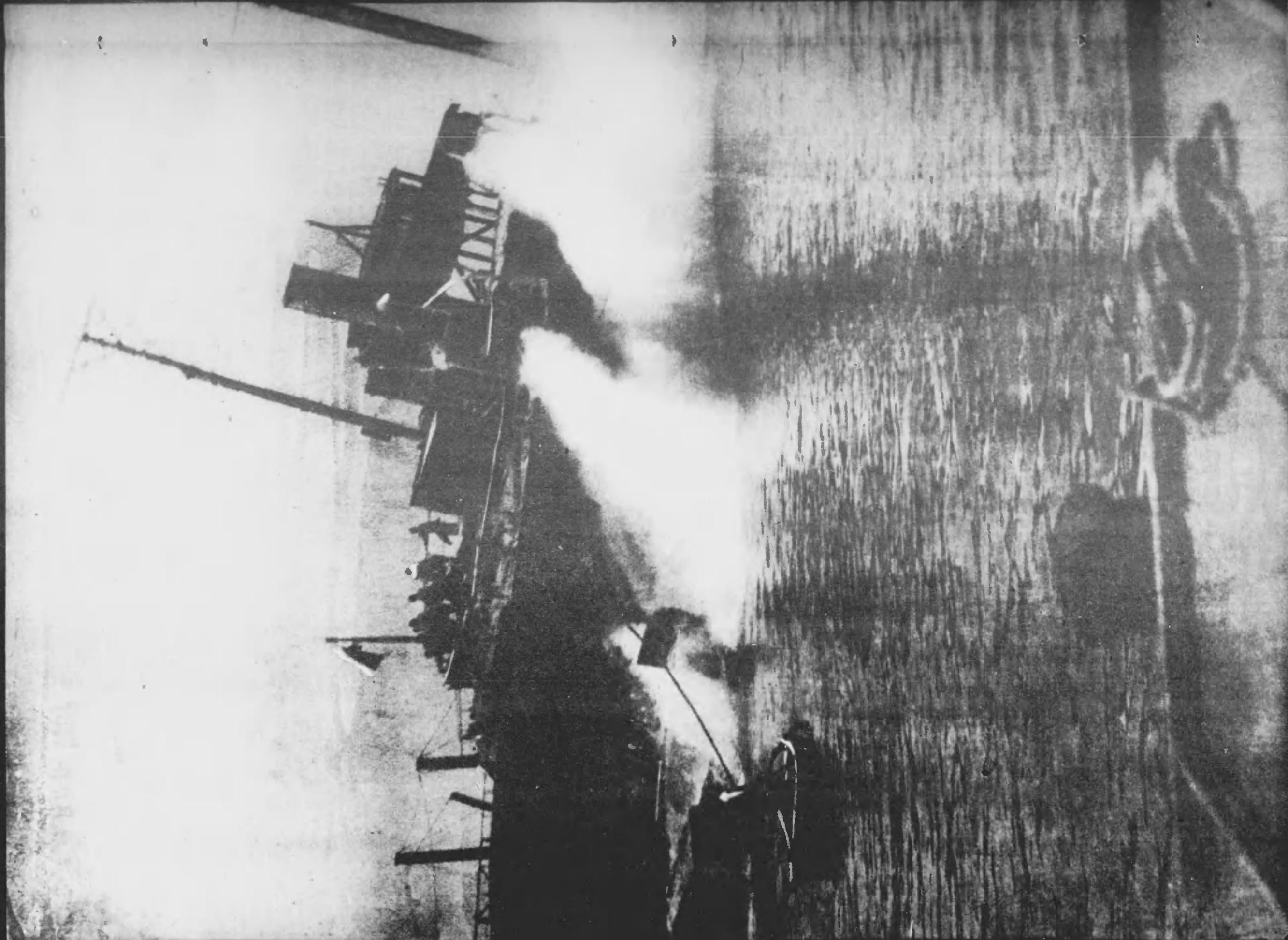
砲孔の原木を明日に接ぐて、砲の準備を終る

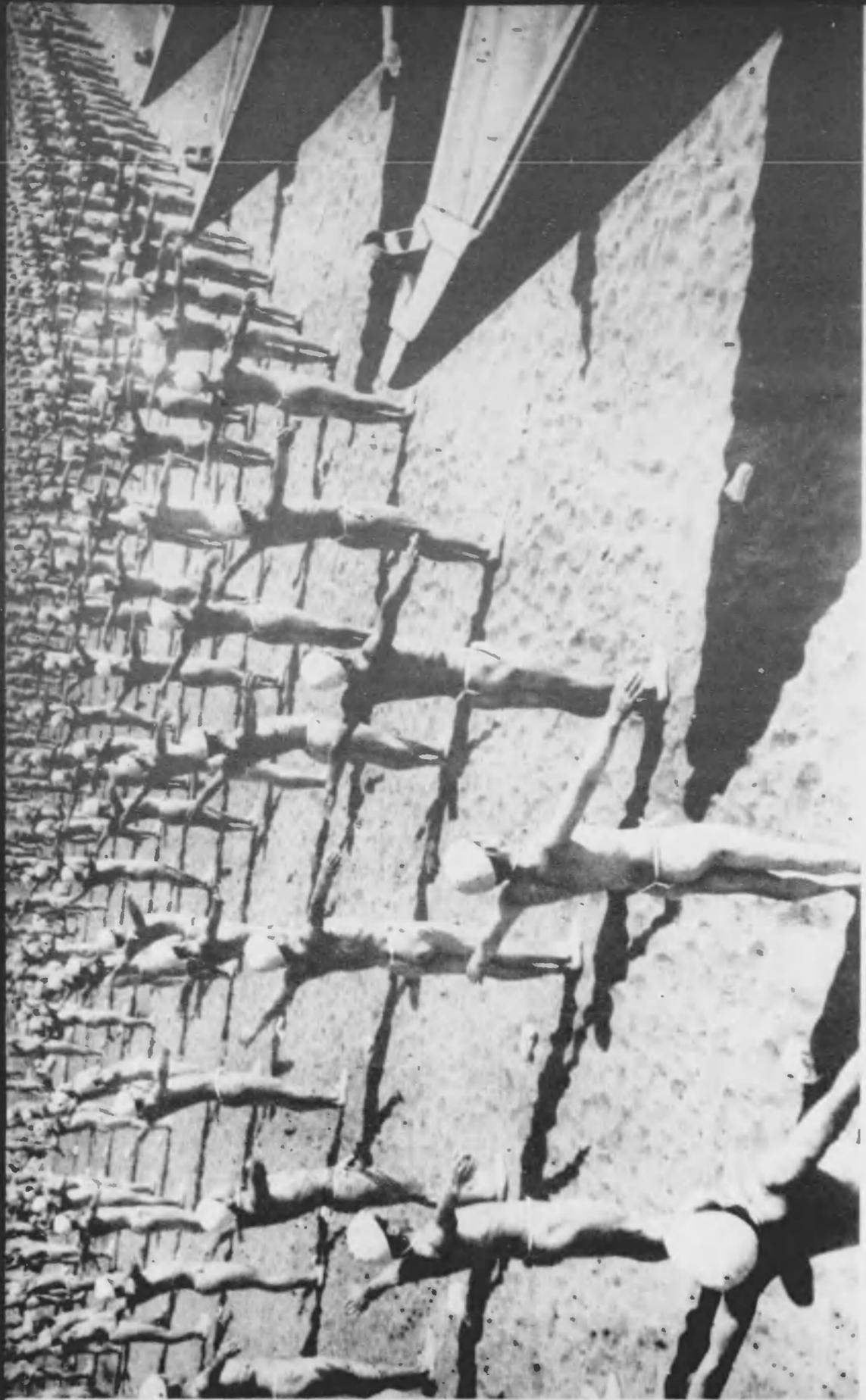


網は切られた。また一船、飛沫をあげて滑り込む。船首の日の丸も鮮やかに、産屋高く法眼の海に乗り出してゆく勇壯な標準式進水

—國策新聞社撮影







僕らは海員だ

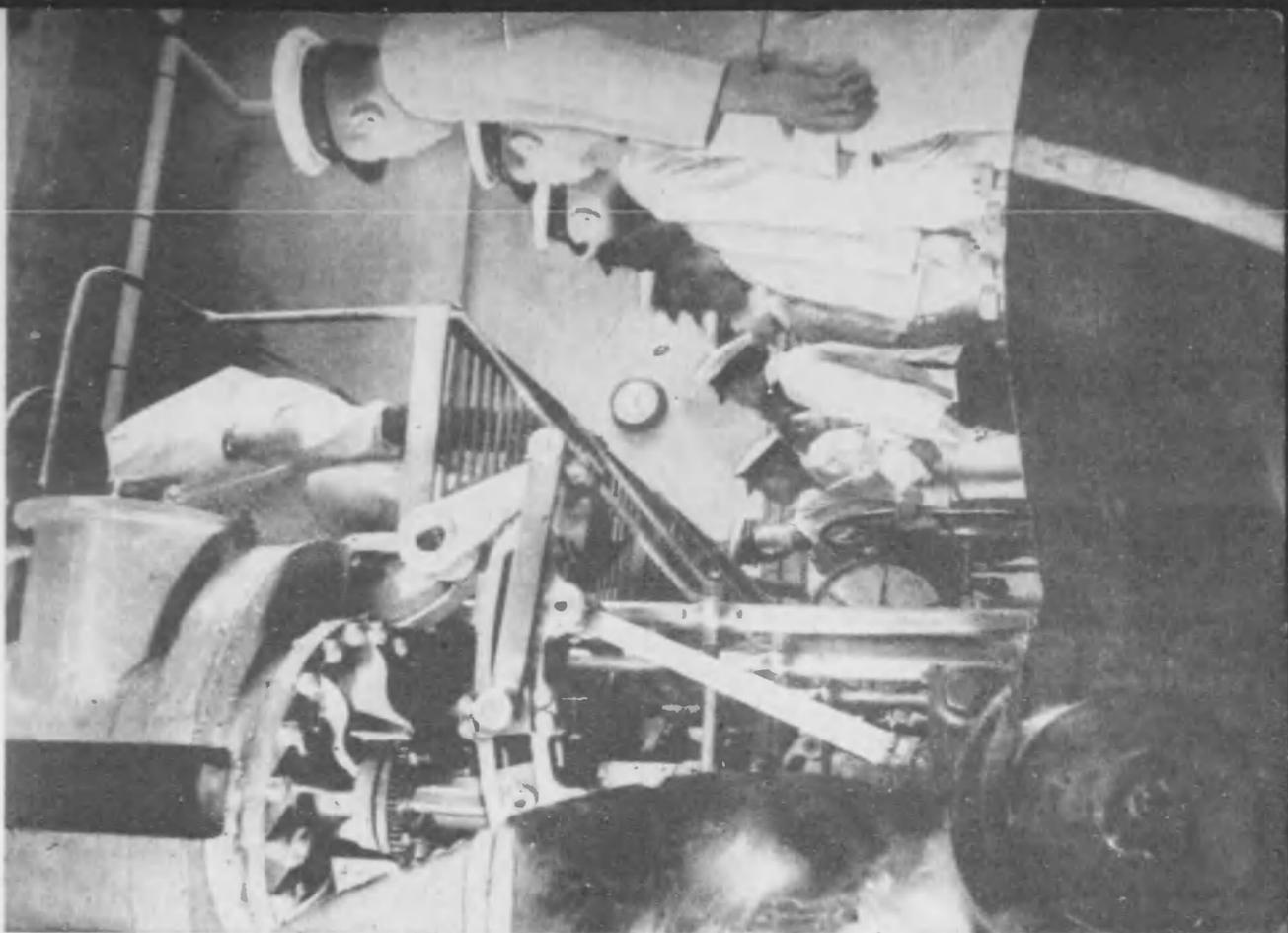
官士船商の練訓 勇猛

難しき船と海員の數
 が、やがて輝かしい勝
 利をもたらすであらう
 若人の血は沸騰する。
 海へ、海員へ、滅敵
 の陣地を選し、大體に
 こめて、艦上機方の若
 者は海への希望を高
 ります。

此、三保の
 水高商船学校では
 これ明日の海員の姿
 成にいとまない。現在
 は主として下級生のみ
 を対象とし、三年生は東
 京及び神戸の商船学校で
 練習を続けてゐる。

大東海員養成の想
 から、かつては五年を
 要した課程も、現在で
 は僅か三年に短縮せら
 れ、その上一年の短期
 訓練生もある。生徒た
 ちにとっては大きな負
 担であるが、海軍の前
 に不可能はない。年
 が半分にすれば倍の、
 三分の一になれば三倍
 の努力をもつて、立派
 に先輩の肩に伍して歩
 かうと、毎日、血の滲
 むやうな練習を続けて
 ゐる。

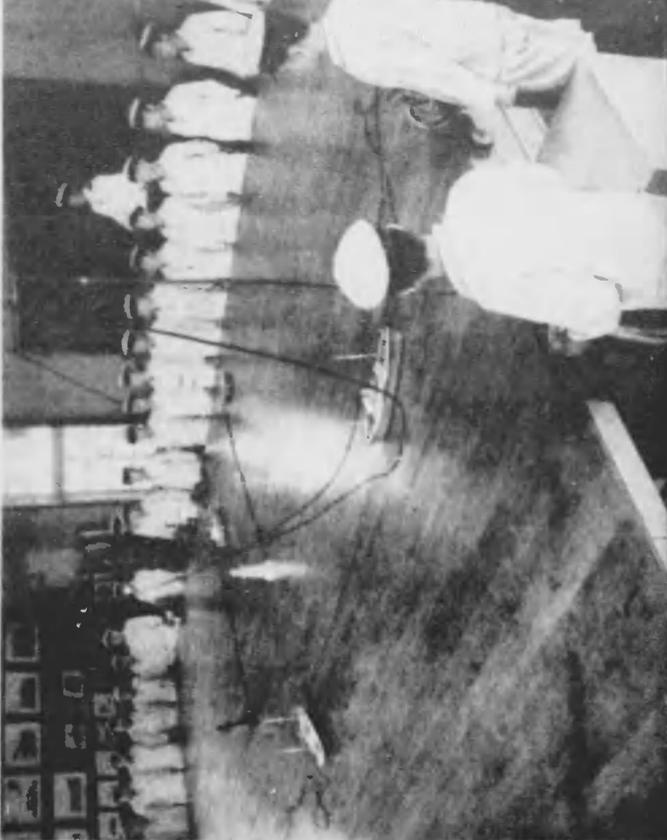
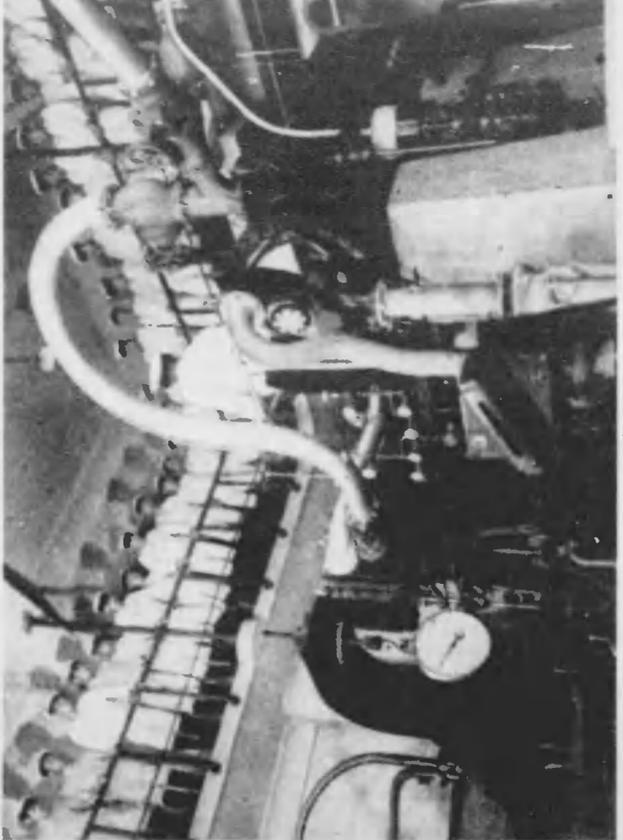
訓練士を叩きつゝ、
 美しい三保に日夜
 鍛へる海若人



機軸最下位ギヤードを操り、
 蒸気機関の運轉練習

ここでは汽鐘の構造説明を、組立
 練習をさせる

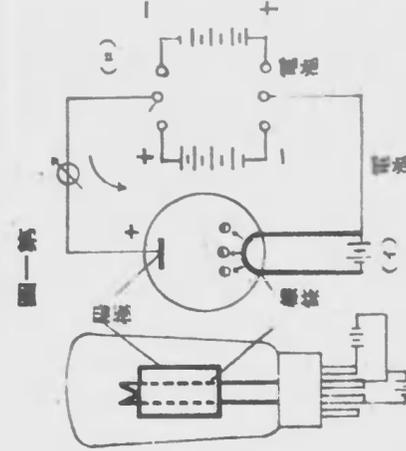
船舶の衝突事故防止のため、電氣操縦の
 模型汽船によつて預防法の練習をさせる



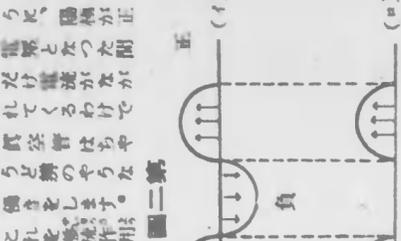
真空管を大切にしましょう

真空管は電波、電波兵器、ラジオ、すべて真空管の賜です。電波機には必ず真空管がついて廻っています。電波兵器として地上部隊と飛行機との連絡に、地上部隊と艦隊との連絡に、飛行機の位置や距離を測るレーダーに、また機つたところでは水中通信に、いちく収束に、いどまがないほどです。

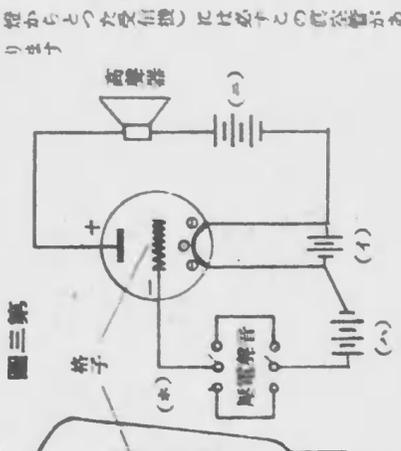
二極真空管とは、第一図に示すやうに格子の中を電子が、これと対向して金属板(陽極)とを射入し、球内の空気を抜いて真空にしたもので



いま電池(イ)で電圧を熱すると、水を熱したときに水蒸気が出るやうに、陰極の表面から負の性質を帯びた電子(電気の原子)がとび出す。このとき電圧(ロ)が左に倒してあると、陰極は帯電してゐるので、陰極からとび出した電子は陰極に引く原理で、陰極側にひきつけられます。電流の方向は電子の方向とは反対ですから、矢印の方向に電流が流れます。次ぎに電圧を右に倒すと、陰極は陰となつて電子は反撥され、陰極に接することができません。従つて電流は流れません。電池の電圧を左右に切替へるかは、第一図(イ)のやうに、極性が逆な電圧を加へると(ロ)に示すやうに、電流が流れます。

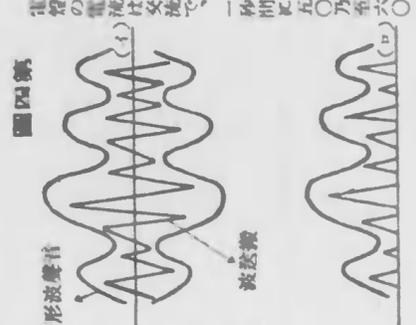


二極真空管とは、第一図に示すやうに格子の中を電子が、これと対向して金属板(陽極)とを射入し、球内の空気を抜いて真空にしたもので



三極真空管といふのは、第三図に示すやうに二極真空管にさらに網状の格子といふ一種を加へたもので、格子を(イ)の電池で接地し、負に帯電させておくと、陰極からとび出した電子はこの負性の場所を制約をうけて、陽極に達する量が変化します。つまり格子の負性の強弱によつて電流が増減されます。そこで電圧(イ)を左に倒し、音響電圧を加へると、格子の負性の強弱が音響電圧の強弱によつて変化しますから、電流は加へられた音響電圧と同じやうに

に變化し、しかも格子側の電圧の變化が陽極側では倍返しに、数十倍もの大きな變化となりまゝです。従つて真空管を二個も三個も使用すると、百倍も千倍も擴大することができる。これを増幅作用といひます。この作用のため、増幅回路は真空管を二つや三つ、高電圧を接続すると十分に大きな音となつて聞えるわけでは



電圧の電流は交流で、一秒間に五〇乃至六〇回方向を變化する一種の振動電流で、この振動電流を周波数といひ、単位をサイクルといひます。音響電流はやはり振動電流で、二五乃至一〇〇〇〇サイクル位の範囲ですが、ラジオの電波の原因波は、驚くやうな数億回サイクルで、これは第一図(イ)の如く音波の形で變化した波です。このやうに電波の周波数を高くするものは、放送局の空中線から放射されたものが空中をよく傳はつてゆくやうにするためです。さてこのやうに周波数が高く、また上下對稱となつた電流は、いかによくてもそのまゝでは十分に高電圧や高電流を動かして管とすることはできません。そこで受信機の中に入つて來た電流による電流は(ロ)に示すやうに、半分だけ切りとつた形に變へて音響に相當する電流を抽出しなければなりません。この作用もまた真空管に上れば幾んどでき、これを増幅作用といふので、格子を持つ真空管を使ふと、増幅作用も併せて感度がよいのです。このほか、真空管は増幅作用なども行はせることができます。

以上は極めて簡単な真空管の基本動作ですが、今日使はれてゐる受信真空管は、格子の数が二つも三つもあつて、巧妙な動作をするやうに工夫されてゐます。

こゝで放送局の受信機に今まで述べた作用をあてはめると、空中線でとらへたラジオの電流は第一球で一度増幅し、第二球で檢波増大し、この音響電流を第三球で増幅して高電圧を動かせるやうになつてをり、別に整流管があつて、これらの真空管に直流通電を供給するしくみやなつてゐるので

真空管は大切な兵器です。従つて真空管を長持ちさせることは戦力の増強なのです。真空管はとかく粗末に取扱はれがちですが、左のやうな點に注意して下さい。

- 一、やたらに電圧を加へないこと、また電圧は電流の少ない場所におき、とまどく増強してやうに
- 二、ラジオを動かさないときは必ず電源を切つて真空管の電圧を下げること
- 三、また真空管を左右に動かしたり、曲げたりしないこと

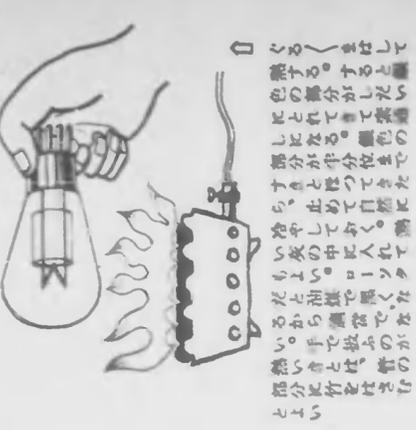
真空管は取扱が悪いと、格子の部分が外れて使用できなくなります。これを防ぐためには真空管を抜き出すときは、必ず真空管のベースの部分(格子でないところ)をもつて、靜かに引ふことが大切です。格子の部分を持つて抜き出すと、格子部分とベースが外れてしまふ虞れがあります。

使用中にこの部分がだらだらになつたものは電氣用のブラクテニアを巻くか、またはマンガイン等の糊で固めさせます。新しい真空管も同じやうに取扱ひ、もし外側に入つてゐるものは必ず裏から取出して押し込み、熱の損傷をよくしてやります。

真空管の故障は絶縁の断絶とか、電線結露、感度低下、熱線不良、雑音等です。また、受信機中に結露が溜まるとついたりするやうな真空管は、脚の接點が不完全なのですから、よく接觸するやうに直すこと、また、はははと付けたら、真空管で感度の低下したものは、並のやうにすれば、回復できるものやよくなるものも多く、相當長い間隔で使へるのです。これにまつては、ガス、電熱などで格子の部分や平均に熱すると、銀色の部分が(全部でなくともよい)消えて透き通つて來ます。そこで自然にさまして、受信機に入れ電氣を通すと、最初内部に青い光がたり、雑音がきこえたりしますが、そのうちによく聞えるやうになります。

真空管を買ふときは悪い不良真空管と交換する

第一圖一 真空管はよく生産される。検査に妥當な女子検査員



真空管は、わが國に生産の少ないニッケル、モリブデン、タングステンなどの合金が使はれてゐるので、これらの原料は回収しなければならぬからです。

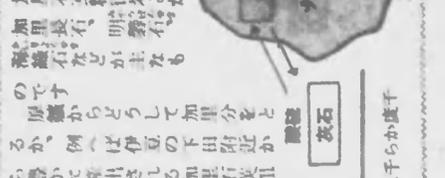
ラジオの部品品のうち、いちばん足りないのは真空管です。現代戦におけるラジオの軍用性に鑑みて、日本放送協會では、できるだけラジオ用の真空管を確保しようと努力してゐます。

必要の方は不良真空管の増産と品質向上を、住所姓名を書いて放送局に申込めば、購入切符をもらへることになつてゐます。その切符を不良真空管を持つて指定のラジオ部によつて購入できるわけでは

加里肥料

植物の成育には必ずつたに必要なのは、みなさんご存じです。とくに加里は肥料以外の化、肥料品として非常にたくさん使ひます。このやうに大切な加里は、今まで世界最大の加里産地を有する盟邦ドイツから主として輸入してゐましたが、開戦以來わが國は國內と共、産地内から求めなくてはならなくなりました。では、どんな方面に求められてゐるのでしょうか。まづ海です。海水から塩を採つた後の苦汁からいろいろの方法で加里がとられます。また、石灰、カシヤ、ホウダクなどの海産物を焼いた灰からも加里が採れます。木灰なども有力な加里肥料です。しかし、いづれもまだ今日の需要をみたすにはとても足りません。

そこで鑛石から直接とる方法が考へられます。その鑛石は、加里石、矽石、明礬石、石膏、重晶石などが主なもの



原鑛からどうして加里分をとるか、例へば伊豆の下田附近から採られる加里石(重晶石)といふ鑛石は、九十%の加里分を含んでゐますが、矽酸やアルミナ等と結合してゐるに溶けないやうな状態であるため、これを溶いたり、薬品で処理したりして、水に溶けるやうにすることが必要です。

そこでこの鑛石を粉末にして、これに加里分を溶かし出す作用をする硫酸石灰とか塩化石灰を加へ、また反応をしやすいするために、石灰石、重晶石等を配合し、これらの混つたものを、約千度で千度—千二百度の高温に熱すると、硫酸石灰または塩化石灰が鑛石中の加里と作用して、加里が硫酸加里または塩化加里の形に變化し、水に溶ける状態となり、これを取り出せばよいのです。またこのやうに加里が水に溶ける状態になつた混合物に水を加へ、さらに炭酸アンモンを加へて反応させると、加里と一結合してアンモン、つまり、硫酸分の混つた肥料ができるのです。

鑛石やまた加里石、明礬石などの鑛石も、何んと同じ工程で水にとける形に變化させ、肥料として用ひてゐるので

加里肥料の製造工程は、鑛石を砕き、硫酸石灰や炭酸アンモンを加へて反応させ、水に溶かす、そして乾燥させることです。

